

駅から始まる“まちづくり”を考える

公益社団法人日本都市計画学会北海道支部は、2014年7月19日、「駅から始まる“まちづくり”を考える」と題する都市地域セミナーを岩見沢市で開催しました。岩見沢複合駅舎の見学後に、設計者並びに市民団体の代表者を招き、新しいまちづくりの取り組みについて熱い議論を交わしました。その一部を紹介します。

講演 1

岩見沢複合駅舎にかけた思い

まちを元気にするデザイン



西村 浩氏
㈱ワークヴィジョンズ代表

全国から集まった376件の応募作品の中から選ばれた4代目の駅舎は、JR北海道、岩見沢市、そして市民が一緒になって考えながらできた経緯があります。

九州育ちの自分は、当初、雪国というのはどういう状況なのか知りませんでした。建築デザインコンペに

応募するため、初めて岩見沢に来たとき、気候の違いを体験すると同時に、駅前にヒトがいなくて、シャッターが閉まった商店街の元気のなさが印象的でした。

そこで、駅という建築を通じて、まちを元気にすることがデザインコンペのテーマだと確信したのです。

コンセプトの1点目が、駅舎がまちとつながって、まちににぎわいを生み出す真っ赤な顔であることを考えました。2点目が、鉄道のまちとしての記憶をもう

一度取り戻すこと、そして3点目が、建築という枠を超えて、未来を見通すということです。

20世紀は、モノをつくる時代でしたが、これからは、モノをつくったあとに、市民に使われ、長生きできるかが大事です。寸断されてきた歴史の流れを、過去から未来に向けて建築をとおして、つなげていくことが大事であり、モノづくりは、歴史を含め未来までつなぐ時間をつくっていくことだと考えたのです。

そのために、古レール^{*1}とレンガを提案しました。夜になると真っ赤なレンガが外から見え、特に、1年の3分の1は冬という気候の地で真っ白雪の中にレンガが浮かび上がる効果があります。

冬こそ、この駅が力を発揮するよう、ガラス面にして赤い駅舎がまちを照らし、中に居る人の動きが外から見える状況をつくりたかったのです。

センターホール^{*2}からはまちを振り返って見えるようにし、自分たちのまちに元気がないことをリアルに感じてもらえるようにしたのです。

人と人とをつなぐデザイン

複合駅舎は、出来上がったあと、市民がそれぞれ思い思いに利用しています。有明連絡歩道でスケッチする姿、写真を撮る姿が見られます。おじいちゃんと孫との散歩場所にもなっています。弁当を広げている光景も見られます。大学のサテライトキャンパスとして、授業や展示会も行われています。

結婚式も行われました。センターホールは、小さな



岩見沢複合駅舎（岩見沢市有明交流プラザ・JR岩見沢駅・有明連絡歩道）（撮影：小川重雄）

子どもがべたりと座れる環境でもあります。鉄道ミュージシャンやカメラマンなどを呼び、鉄道文化をひろめるイベントも開催されています。こうして、いまでも活動が続いていることが岩見沢の最大の成果だと思います。

人と人がつながって新たなコミュニティが生まれ、さらに多くの市民が参加してにぎわいが持続します。ただイベントをやっただけではなく、同時にそれが雇用につながっていくことが大事だと思います。

自分たちで走れる力、行政に頼っていかなくてもまちをつくっていく力、駅づくりがまちづくりにつながる、モノをつくり、コトをつくり、ヒトを育て、それがカネにつながっていく循環ができることが持続的なまちの物語につながっていくのだと思います。

講演2

まちの魅力を駅から発信する

「いわみざわ駅まる。」の発足経緯



平野 義文 氏
「いわみざわ駅まる。」
実行委員会代表

「いわみざわ駅まる。」という団体が誕生した経緯は、魅力的な駅ができ、市の観光振興ビジョンを2011年に策定したとき、駅舎がテーマになったことです。

岩見沢は、駅が開設されてから人が住み着いた歴史があり、駅から始まったまちです。そこで、まちの再生も駅から始めてみようとして誕生した団体が「いわみざわ駅まる。」です。将来は、再び、駅に人が集まることになればと願っています。

岩見沢駅には、1930年代に東北以北で最大の操車場ができ、1日当たり4千両の貨物と2万人以上の乗降客でにぎわいました。まちは、鉄道交通の拠点であったと同時に、それ以上に地域のハブ^{※3}としての役割があったと考えています。行商列車が小樽から着くと、その物資を周辺から買付に来る人が集まり、仕入れて周辺のまちに戻るといった動きがあり、岩見沢は情報、価値観、文化のハブになっていたと考えられるのです。

※1 古レール
線路に使われていた1m当たり30kgの古レールを窓部材として使用。
※2 センターホール
複合駅舎・有明交流プラザの2階にある多目的スペース。
※3 ハブ
ネットワークの中心のこと。
※4 クロフォード
幌内鉄道の建設を指導したお雇い外国人。

活動の目的

「いわみざわ駅まる。」は、団体名であると同時にイベント名でもあります。活動には三つの思いがあり、一つは、市民に対して鉄道文化を発信することです。そのため、駅北に残る明治期のレールセンターの建物を会場に借りて鉄道に関するミュージシャンやカメラマンを呼んだ活動もしています。

二つ目は、市民に駅の特徴を知ってもらうガイドツアーを実施し、少しずつその魅力を発信しています。

三つ目としては、古い鉄橋の再生です。旧幌内線には、クロフォード^{※4}がアメリカに発注した2つの鉄橋が架かっていました。今から130年前に出来た橋ですが、途中から栃木県の私鉄に移設され、現在、一つは、三島で大事に保存されています。しかし、もう一つは、岩見沢で野ざらしになっています。これを、まちの財産として再生させるため、市民の間で機運を高めていきたいと考えています。

活動の願望

我々の活動は、こつこつと3年間、ボランティアで続けてきました。しかし、ボランティアでは派手なことができませんが、地味なことができません。

もう一つ、岩見沢のアイデンティティをつくるのが大事だと考え、昨年、5月に社団法人化してイワホという観光物産センターの運営に当たっています。

私たちの悲願は、まちづくりでメシが食える人を育てることですが、経済的にきびしい状況にあります。

岩見沢といえば、物理的なハブとソフトの両面が整うことが大事であり、ウェブサイトも制作中です。

会員の構成は、大学生から60歳台の男女、約50名です。情報誌のカイの特集や新聞で大きく取上げてもらっています。先日は、NHK札幌放送局の「つながる@きたカフェ」の取材も受けました。

活動を続けながら地域の誇り、シビックプライドをつくりたいと考え、それに向って持続前進しているというのが私たちの姿です。



三島市のJR東海総合研修センターで保存されている日本最古のアメリカ製鉄橋
(撮影：葛西 章)

質疑応答

田村 (学会副支部長) 稚内、室蘭の駅舎にも関わったことがあります。行政の役割は、駅舎と市民とを結び付けるために大事だと思います。岩見沢ではどのように、それが練りこまれていたのでしょうか。

西村 デザインコンペで刻印レンガを提案しましたが、最初はこうした方がいいのか途方にくれた時期がありました。たまたま札幌で集まった仲間の中から岩見沢の関係者をつかまえて、市民有志を集めてもらったのです。

活動を始めた当初、市民から最初に言われたことは「本当に来るとは思いませんでした」だった。これまで、公共施設の設計者と市民が顔を合わせることがなかった点を実感しました。

定期的に通うようになってから市もJRも市民の活動を裏で支えてくれました。大事なことは、続けることです。どんな逆境でも、途切れなく続けていくことです。そのため、市民が主役になる組織、状況をつくり、活動が続けられることが大事です。

平野 自分の場合、所属している青年会議所の先輩に呼ばれて参加しました。刻印レンガの募集が終わり、駅ができる活動は一度止まりますが、その後、続けて参加した観光振興ビジョンの策定が契機になり、6人から始めて、今は約50人になっています。参加者の誰もが自分のスキルアップになっていると思います。

上谷 (岩見沢市副市長) 西村さんの素晴らしい駅の提案に市民が真剣に応えたこととなります。岩見沢市の郊外は良好な住宅地ですが、中心市街地が寂しい状況になっています。点から線に広げ、面につながるようにするには、「いわみざわ駅まる。」から始まる市民の活動が、市民力、行政力の向上に寄与していくシナジー効果^{※5}を期待していきたいと思っています。

「らぶりっく!!いわみざわ」の継承

平野 いま構想しているのは、出生を刻印したレンガをプレゼントするシステムをつくることです。実家が無くなくても自分の出生レンガが岩見沢にあれば、幾つになっても故郷として愛着をもってもらえます。

レンガの番号に現地に行けばわかる装置をつくり、自分の子ども、旅行したカップルがメッセージを埋め

ておくなど、いろいろな使い方があると思います。刻印レンガは、永遠に積み終わりません。10年続けばまちの顔に、20年で市民の誇りに、50年で価値となります。どこのまちでもなく、レンガの駅舎がある岩見沢でこそできるストーリーだと思います。いま、駅前通りがピンチになっていますが、例えば、歩道が広がった駅前通りの地先に刻印レンガでベンチやモニュメントをつくれば、統一感、価値観が生まれると思います。権利面など法的に難しい課題がありますが、駅から始まるまちづくりには効果的です。

子どもたちと取り組む空洞化対策

西村 福島県の喜多方市は、蔵とラーメンのまちですが、行ってみるとがっかりします。拡幅した駅前通りが寂しく、蔵があっても公共空間が貧相な状況になっています。そこで、南町2850という敷地で小田付郷町衆会や喜多方桐桜高校エリアマネジメント科の生徒さんたちと一緒にデザインワークショップを通して自分たちで少しずつ整備をしています。

私たちの世代が子どものころの記憶には中心市街地のにぎわいがありますが、今の子どもたちは、まちに来ることがありません。中心市街地に子どもたちを関わらせることが大事になっています。

喜多方の古い蔵を借りて、絵本蔵もつくっています。子どもたち、子育て世代のお母さんたちがやって来る場所です。各グループの意見を集約してデザインし、実際につくり込みます。芝生を張り、石材店の協力で調達した端材の切り石をおき、壁画をアーティストといっしょに描いています。また、同高校建設科の生徒さんが建築士会の方々に指導してもらいながら老朽化した蔵の床張りをするなど、絵本蔵ができていきます。卒業生も参加するなど子ども達が継続して関わることが特徴です。今年は2年目で、福島ビエンナーレ^{※6}の会場の一つになることが決まっています。

いまや経済成長が右肩上がりの時代から、右肩下が



刻印レンガには、受付番号、出身地、名前を丁寧に加工

※5 シナジー効果
1 + 1 が 2 以上の相乗効果を生むこと。

※6 ビエンナーレ
2年に1度開催される美術展覧会のこと。

りになっています。50年先、100年先を見て、遠くに届く遠投力をもったボールを投げられることが大事だと建築家の内藤廣さんがおっしゃっています。全国どの商店街でも店舗の床が空いているにもかかわらず、いまだに再開発しようとしているまちもあります。今までのやり方では駄目なのです。

21世紀型のまちづくり

西村 すべてが都市のリノベーションの時代です。これまで、各自の仕事を積上げればまちができる時代でしたが、社会状況が変わりすべての人が、まちの戦略を共有しなければいけないようになっていきます。日々の暮らしぶりなど、小さなことでも共有できなければならぬのです。

再開発でない新しいまちづくりの方法とはどんなことなのか。行政は前例の有無を問題にしますが、前例のない取り組みがこれからのまちづくりになります。モノづくりからのやり方を21世紀型に変えていくことがこれからのまちづくりです。平野さんたちの活動でもあります。

出身地である佐賀市の中心市街地にも青空駐車場が増えています。固定資産税を払うため全国各地で駐車場という土地利用の墓場になっています。

これからは空き地を寄せ集めて駐車場にするなど、空き地をコントロールしながら新しいまちをつくっていくことが重要なのです。

中心市街地の空き地利用としてつくる原っぱは、公園法で規制されている公園や広場ではありません。地域の人が見守り、自己責任で自由に利用できます。空き地に緑の環境を挿入すると、価値が変わっていきます。そうして空き地が増えると、また原っぱができて、まちがにぎわいます。

佐賀市のわいわいコンテナプロジェクトは、芝生とデッキ、海上コンテナを使いどういったコンテンツがあ

れば、人を呼べるのかという社会実験です。300種類の雑誌、絵本とマンガを置くと、平日の昼間に人が来ます。夕方、子どもたちが来ると、近所で売られているおまんじゅうや雑貨が売れるようになります。ご飯を食べて帰る人が増えます。商売にダイレクトにつながるのではなく、小学生、大人、女子、おじいさんが平日に集まる環境をいかにまちにつくるかです。

芝生も地域の子もたちが自分で張ると、大事にします。こんな社会実験を繰り返し、少しずつ、昼間に人が来ると違う商売が成り立つようになります。

岩見沢駅前通りのまちづくり

会場 東京から来られて、岩見沢の駅前通りをどう思われますか。

西村 駅前通りは、駅舎をつくっている段階から気になっていました。ただ拡幅するのではなく、うまく使いこなす方法を考えることです。デザインよりもソフトの問題です。道路占用の緩和などをしながら、使いやすい道路にしていくことが大事です。

交通まちづくりと防災が、これからの都市を変えるきっかけになります。駐車場法は、道路交通の円滑化、量として駐車場を確保することから始まりましたが、いまは量から質に変わり、どういう駐車場をつくればいいのかを考えることが大事です。

1人当たりの車の保有台数は、全国地方都市平均で0.8台です。1台当たりの必要面積は8畳です。目的地と出発地があるため、1台当たり倍の16畳が必要になります。また、地方都市の中心市街地は20~30%が駐車場面積になっています、これに道路面積25%をあわせるとまちの半分以上が車のための空間です。

車を減らしていくのも必要ですが、減らすと同時に適切に配置するため、この50%を武器に使うと、まちが変わると思います。道路のあり方、駐車場の配置のあり方をコントロールすることが空き店舗対策を考えるよりも大事です。そうすると、まちの価値が変わり、民間投資のモチベーションが上がり、デベロッパーがマンションをつくりたいということになります。考え方を180度変えて、道路や空き地の方からビジョンをつくるのが大事だと思います。

(公益社団法人日本都市計画学会北海道支部：鈴木 栄基)



そらち炭釜の記憶マネジメントセンターの石蔵で開催したセミナーの様子